

一六タルト、六時屋タルト

四国松山のお土産に、「一六タルト」がある。あんこをカステラで巻いたお菓子で、全国に似たようなもの「は数多あるが、やっぱり「一六タルト」が代表格である。このメーカーである一六（いちろく）本舗は、明治一六年に創業したので、この社名になったそうだ。

お隣の奥さんは松山出身だ。先日里帰りして、お土産に「六時屋タルト」を頂いた。松山のタルトには、一六と六時屋と2つあることは知っていたが、すぐに思い浮かぶのは一六の方。なぜか「坊ちゃん」とセットで記憶している。松山、坊ちゃん、一六タルト、という感じ。坊ちゃんの好物は？と聞かれれば、一六タルトと答えるだろう。

さて、松山のタルトのキャッチコピーで、「まっすぐ正直に」というのがある。何の疑いもなく、一六タルトが、まっすぐ正直、だと思っていた。しかし、お隣から頂いた「六時屋タルト」の箱に、「針はまっすぐ正直に」と書いてあるのを見て、全てが結びついて、頭の中がスッキリ整理された。

時計の針は、6時ちょうどに短針長針が一直線になる。「まっすぐ正直に」は、六時屋の企業理念を示した言葉で、これが社名の由来だそうだ。「六時屋」という言葉からは、「屋」がついているからかえって、時計の針が6時ちょうどを指している絵は、頭の中に浮かんでこなかった。キーワードの「針」が飛んでいたのだ。

最近、(大袈裟に言うと)人間の創造性について研究している。グループ討論の際の、発想法やメンバー間の相互触発とはどういうことか、という研究である。

相互触発の肝は、個人では欠けている部分を、他人と補い合い埋めることができることにある。ジグソーパズルのピースが見つかるように・鉄道が結ばれるように、欠けていた部分がつながることで、はじめて全体が機能するようになる。

松山のタルトの場合、すでに自分の頭の中にあっただのは「一六本舗」と「まっすぐ正直に」欠けていた(忘れていた)のは、「針」と「六時屋」である。六時屋のマークは、時計の円盤に6時を指す針のイメージを筆で書いたもの。タルトの渦巻きのあんこにも見える。今は、マークを見ているだけでも、創業者と対話しているような気持ちになれて、知識の体系が広がったような気がする。まっすぐ、時計の針、筆書きのマーク・・・、これらが一度に創業者の頭の中に浮かんだのではないかと想像したとき、その発想は、もう私のものになったのだ。

NHKの大河ドラマは、毎回最後に、登場人物ゆかりの地やエピソードを紹介してくれるので、自分に欠けていた部分に気づくと同時に、ちょっとした情報が与えられることで、自分の知識の体系が大きく広がると実感することがある。おそらく、番組作りに携わる人たちが、時代考証など、いろいろ勉強するなかで、そうした実感を何度もしているのだろう。それで、この実感の喜びこそが伝えるべきものだ、と気づいたのではないか。教育やまちづくりワークショップでのグループ討論を企画する際、こうした「実感の瞬間」を演出することが肝である。

1：東京在住のコンサル仲間が、日本一重たいお土産は対馬の「かすまき」だと言うので、天草の「赤まき」を送った。天草の勝ち。[天草・赤まき](#) [検索](#) で購入へ！